

“calling”としての悲しみ

——J. D. サリンジャー 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるラザロのエピソードの パロディと死者の存在論

井 出 達 郎

J. D. サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（1951年）は、今年度の公開講義がテーマとしている「感情」という視点がたとえなかったとしても、発表当時から現在もなお、十代の若者の欲求不満の感情を描いた作品として読まれている。しかし本講義では、こうした従来の読み方では汲み取ることができない感情が作品に潜んでいること、すなわち、死者を想う悲しみの感情が潜んでいることを明らかにしたい。それは、死者をめぐる“calling”という出来事を通して描かれながら、死者の存在論ともいうべき問題と深く結びついている。

十代の少年であるホールデンの独白からなるこの作品は、その表面的な言葉のうえからでは、死者を想う悲しみという感情を読み取ることは簡単ではない。成績不良を理由に高校から退学し、ニューヨークの街を放浪するホールデンは、その道中で出会う人々に対して、「インチキ（phony）」という言葉をお癖のように言い続ける。その繰り返される言葉からは、確かに、いわゆる「大人になりきれない若者」の社会に不満といったような、紋切り型の感情だけが目立ってしまう。

“calling”としての悲しみ

しかし、そもそも感情とは、言葉だけを通して表出されるものでは決してない。顔がほころぶ、無視をする、うつむく、鼻歌を歌うなど、たとえ言葉としてはっきりと明示されなくても、身体的な行動を通してもまた自然とにじみ出されるものである。この点から作品を改めて読むと、単なる若者の欲求不満とは決して解釈できない、ある特異な行動が繰り返し描かれていることに気がつく。それは、「眠っている人間を起こす」という行動である。寮で喧嘩騒ぎをしてルームメイトを起こす。真夜中に寮を出る際に大声を出してその階にいた全員が目を覚ましたと確信する。名前だけ知っていた女の子を電話で起こす。眠っていた娼婦を呼び出してもらう。こっそり帰った実家で妹のフィービーを起こす。前の学校でお世話になっていた先生を電話で起こす。ホールデンの一連の放浪の中で、こうした「眠っている人間を起こす」という行動は、よく言われる「インチキ」という言葉に劣らないほどに、不自然なほど繰り返し描かれている。

注目すべきは、この不自然に思える行動は、聖書のラザロのエピソード、すなわち、イエスがラザロという死者を「起こす」というエピソードを想起させるように描かれている点である。表面的には子どものいたずらとしか思えない行動が、実は聖書という大きな物語と結びついていることは、ホールデンが名前しか知らなかったキャヴェンディッシュという女性に電話をかける場面に端的に示されている。真夜中にいきなり電話をかけたホールデンに対して、キャヴェンディッシュは、「こんなずれた時間に電話をかけてくるなんて、まったく (“This is certainly a peculiar time to call a person up, though, Jesus Christ.”)」という言葉をつぶやく。ここで見逃せないのは、最後の“Jesus Christ”という言葉の使われ方である。前後の文脈を考えると、これは驚きや困惑を表した感嘆詞として読むのが普通である。しかし、いうまでもなく、これは「イエス・キリスト」の名前その

“calling”としての悲しみ

ものでもある。そのため、この文には、「ずれた時間に眠っている人間を起こすイエス・キリスト」というイメージが含まれることになる。それは一見奇抜なイメージに思われるが、実は、聖書のラザロのエピソードが描いているものこそ、その「ずれた時間に眠っている人間を起こすイエス・キリスト」にほかならない。イエスは、ラザロという人間が病気にかかっていることを聞くのだが、それを聞いてすぐにラザロのところに行くのではなく、2日後に出かけていく。そのため、到着したところにはラザロはすでに死んでおり、イエスは早く来なかったことを責められる。しかし、その時間の「ずれ」をもろともせず、イエスはラザロを「起こす」。「ずれた時間に眠っている人間を起こす」ことにおいて、ホールデンとイエスは似ているのである。

その類似点は、さらに、作品のもつ「電話をする (“calling”）」という動作において、より強められている。キャヴェンディッシュの箇所でもみたように、ホールデンが眠っている人間を起こすとき、彼は多くの場面で電話を使うのだが、この作品では、その電話には特別な意味、すなわち、生者から死者へ呼びかける行為を思わせる意味が結びつけられている。好きな作家を挙げるという作中の一場面において、ホールデンは、好きな作家とは、作品を読み終わった後に電話をかけたくくなるような人間であると言いながら、軒並み死んだ作家の名前を挙げ続ける。ホールデンにとって、電話をすることは、死者へ呼びかけるという行為と、無意識のうちにひとつになっている。それは、ラザロのエピソードで描かれる、生者から死者へなされる呼びかけと、かたちのうえでかわるところはない。

こうしてホールデンの行動からは、ラザロという死者を起こしたイエスとの重なりの中で、死者への呼びかけをしたいという感情が透けてみえて

“calling”としての悲しみ

くる。では、ホールデンにとって、その呼びかけたい死者とは具体的に誰か。それは、白血病で亡くなったという、弟のアリーである。ホールデンは、彼の一連の放浪の中で、アリーの存在にたびたび言及しながら、特に、周りの人間が彼を「いない」ものとして扱う態度に対して、大きな憤りをみせていく。ホールデンの言動の根本には、社会への不満といった単純な感情ではなく、この死者に対する悲しみの感情がある。いうまでもなく、イエスの“calling”が死者を現実に生き返らせるのに対して、ホールデンの“calling”は、その稚拙なパロディにすぎない。しかしホールデンは、その稚拙なパロディの裏返しとして、イエスに匹敵する行為を行っている。それは、アリーの存在を常に読者に思い起こさせるという行為、実際に死者を生き返らせるのとは違ったかたちでの、「死者をおこす」という行為である。

死者を思い起こさせたいという感情は、すでに竹内康浩が詳細に論じているように、ホールデンのアリーへの変身願望とでもいうべきものに見ることができる。ホールデンは、アリーの「赤毛」、「左利き」、「キャッチャー・ミットを使っていた」という特徴に対して、「赤い帽子をかぶる」、「わざと右手に怪我を負う」、「ライ麦畑のキャッチャーになりたいと宣言する」といった言動を通して、それぞれを暗に模倣している。そこには、「いない」という存在を自分が模倣することで思い起こさせたいという、ホールデンの秘められた感情を読みとることができる。

この「いない」死者を思い起こさせたいという感情は、逆説的なことに、「いない」という悲しみが強ければ強いほど、まさにそのことによって、その当の「いない」という存在がより強く喚起されることになる。死者の存在をめぐる作品を発表し続けている若松英輔は、その逆説を次のように説明している。「死者が接近するとき、私たちの魂は悲しみにふるえる。悲しみは、死者が訪れる合図である。それは悲哀の経験だが、私たちに寄

“calling”としての悲しみ

り添う死者の存在を知る、慰めの経験でもある」。この死者の存在をめぐる逆説からみれば、ホールデンの「死者をおこす」という行為は、決してラザロのエピソードの稚拙なパロディという意味だけにはとどまらなくなる。現実には決して死者を生き返らせることができなくても、しかしそれでもなお、その存在を思い起こす行為をし続けること、それは、その死者を実際には生き返らせることができないという事実を引き受ければ引き受けるほど、「いない」という死者の存在の強さがより際立っていくことを意味する。ラザロのエピソードのパロディを行いつつ、その一方で死者を思い起こさせ続けるホールデンの行為は、この逆説的な死者の存在論にそのまま重なっている。

以上のように、「眠っている人間を起こす」というラザロのエピソードのパロディの行動は、ホールデンが直接は言葉に表していない、アリーという死者をめぐる悲しみの感情の表出になっていると読むことができる。それは、死者への呼びかけの稚拙なパロディであると同時に、それが現実には死者を生き返らせることに決して結びつかないというまさにその稚拙さによって、死者の存在をより強く喚起させるものになっている。死者に呼びかけること、その呼びかけを通して死者の存在を思い起こすこと、ホールデンの悲しみの感情とは、そのような“calling”としての悲しみにほかならない。

*本講義は、『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第38号(2013)の論文「死者をおこす——J. D. サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるラザロのエピソードのパロディと死者の存在論」を、公開講義の「感情」というテーマにそって修正したものである。